郭沫若の旧居を訪ねて

― 北京の中国近現代文学地図（4）―

李　慶国

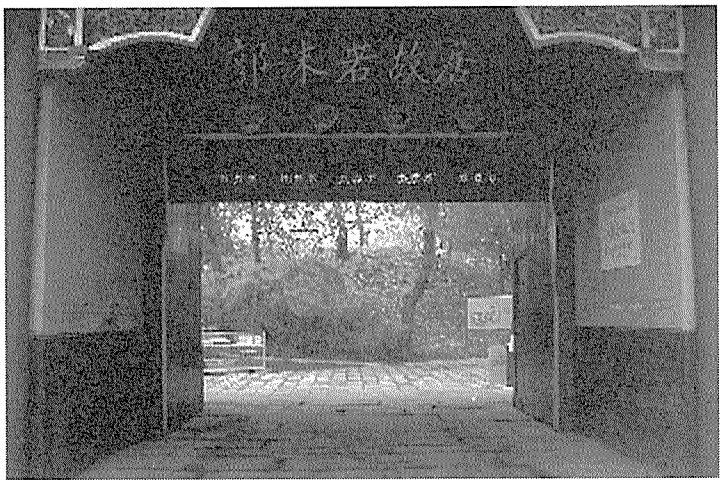
夜がどんなに長かろうと、
必ず夜明けはくるものだ……
太陽を乗せた竜車の音が響いてくる、
黎明はそう遠くはあるまい。
　郭沫若「赤光の中でまた逢おう」（1923年12月）（須田禎一訳）より[1)]

Ⅰ．郭沫若の旧居

北京の什刹海の前海西街18号は郭沫若の旧居である。

郭沫若（Guō Mòruò）は1963年11月にここに居を定め、1978年6月になくなるまでの15年間をここで過ごした。郭沫若の旧居はもとの清朝恭親王府の厩で、民国初期にある人がこれを買いとり住居に改築した。人民共和国建国後はモンゴル人民共和国大使館として一時使用されたこともある。1982年8月に中国政府によって「国家重点文物保護単位」（国の重要文化財）に指定され、1988年6月からは郭沫若記念館として一般公開されている[2)]。

正門の上に周恩来夫人鄧穎超が揮毫した「郭沫若故居」の黒地金字の扁額がかかっている。正門を入ると、広い前院（外院）が見える。庭には二つの丘があり、木や花が植えられている。庭の小道の右側に郭沫若の銅像、その近くに于立群夫人[3)]とともに西四大院胡同5号（1949年から1963年までの住居）から移植した銀杏の木がある。銅像の郭沫若の物静かで優しい視線に見守られて、銀杏の木は今や大きく茂っている。



郭沫若の旧居

郭沫若の旧居は典型的な四合院である。垂花門をくぐると、広い中庭が開ける。東棟と西棟（もとは子供達の部屋）が陳列室になっている。写真、手稿、書籍、文献資料など数多くの実物が展示され、文豪でありかつ革命家であった郭沫若の数奇な生涯、彼の文学、歴史、考古学などの諸分野での功績及び文化的事業、国際平和運動ために尽した貢献などが分かるようになっている。

正房（母屋）の西側の部屋は応接室で、周恩来が何度も訪れた部屋である。東側の部屋は郭沫若の書斎兼執務室である。机の上には眼鏡、補聴器、ムシメガネ、筆と硯などが生前のままに置いてある。部屋の隅に小さな本箱がある。その蓋に郭沫若は「滄海遺粟」（滄海の一粒粟）と書いている。彼が日本に亡命中に著した『両周金文辞大系考釈』、『金文叢

考』などの古文字研究著作の手稿はその本箱に収められている。机の正面の壁には毛沢東直筆の詞「西江月・井岡山」の額がある。その向かいの壁には、于立群が書いた毛沢東の詩詞「沁園春・雪」の掛け軸が掛けられている。執務室の東側につながる部屋は郭沫若の寝室である。ベッドのそばに『二十四史』が並んでいる。

正房の後ろ、「後置房」の真ん中の部屋は于立群の書斎である。そこには郭沫若と于立群の書が多く掛かっている。郭沫若と夫人は折にふれてここで碑文の拓本を鑑賞し、書の技法を研究したそうだ。

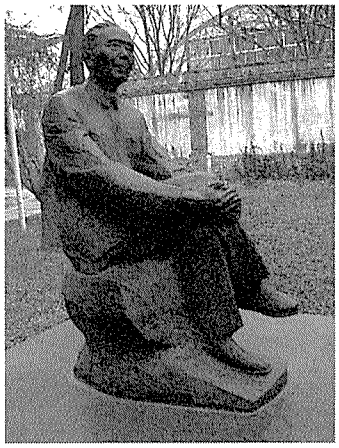
郭沫若はこの旧居で数百万字の論文、専門書及び詩歌などの作品を書き上げた。しかし、ここで過ごした彼の生涯最後の15年間のうち10年は「文化大革命」であった。郭沫若は晩年を文化大革命の嵐のなかで過ごしたと言ってもよい。彼自身は周恩来の庇護のおかげで大きな政治的な打撃と肉体的な迫害を受けなかったが、彼の二人の息子は迫害されて殺され、晩年に子を失うという悲運に見舞われた。彼は最後の何年間をよく机に向かって息子の日記を丁寧に書き写し、父親として息子さえ守れなかった悔しさと悲しみをこの作業に託していた。

Ⅱ．郭沫若の生涯と創作

郭沫若は、中国現代の詩人、劇作家、古文字学者、歴史学者、考古学者、革命家である。1892年11月16日に四川省楽山県観峨郷沙湾鎮に生まれた。本名は郭開貞。別号尚武、筆名は郭沫若、他に郭鼎堂、麦克昂、杜衡、易坎人、高汝鴻など20種類以上ある。「沫若」とは郷里に近く流れる沫水・若水という河の名をとってつけたものである。

郭沫若は幼い頃母に唐詩の朗唱を教わった。彼は自伝『わたしの学生時代』に「母はわたしの本当の初学の教師であった」[4)]と記している。6歳から15歳まで家塾「綏山山館」で儒家の古典「四書五経」及び『唐詩三百首』、『千家詩』、『詩品』などを学び、また当時の新しい雑誌・新聞『啓蒙画報』、『新小説』、『浙江潮』、政治小説『経国美談』[5)]や林紓の翻訳小説などを愛読し、新しい思想と外国文学の影響を受けた。

16歳のとき、彼は嘉定府中学堂に入り、後に成都高等学堂の付属中学に転校した。21歳のとき、父母の命で張瓊華[6)]と結婚をした。1913年春、成都高等学校理科に進学し、同年12月に長兄の援助により日本へ留学した。



郭沫若の銅像

東京第一高等学校予科、岡山第六高等学校を経て、1918年9月に九州帝大医学部に入学。在学中、郁達夫・成仿吾らと文学団体創造社をつくり、文学活動を始めた。処女詩集『女神』(21年)を始め初期の作はタゴール、ゲーテ、ホイットマンの影響を受けたと自ら語る。1922年に『創造』季刊を発刊、その後、この団体は『創造週報』、『創造日』(『中華新報』文学副刊)、『創造月刊』などを発行、文学研究会の「人生のための芸術」に対し「芸術のための芸術」を主張したが、のち革命文学に転じ、20年代には最も影響力の大きい文学社団の一つとなった。この間、六

高時代に佐藤富子[7]と結婚した。

1923年3月に九州帝大を卒業し、家族と帰国した。医学を業とせず、文学と革命活動に身を投じるためであった。1924年には河上肇の『社会組織と社会革命』を翻訳し、マルクス主義に近づいていく。1926年には国民革命の拠点広州へ赴き、その翌年北伐革命軍に参加、政治部で宣伝活動に従事する。1927年3月に蒋介石の反動性を見抜き、「今日の蒋介石を見よ」という有名な檄文を発表、革命陣営に警告を発した。蒋介石の4・12クーデター後、蒋介石の逮捕令を逃れて1928年2月に日本に亡命した。

郭沫若は千葉県市川市に9年間住み、日本の憲兵・警察の厳しい監視を受けながら、苦しい生活のなかで、中国古代史と甲骨文・金文を研究し、『中国古代社会研究』(30年)、『西周金文辞大系』(32年)、『卜辞通纂』(33年)、『殷契粋編』(37年) などの14種の著作を出版した。

郭沫若の書斎兼執務室

1937年日中戦争開始の直後、妻と5人の子どもを残して単身日本を脱出して帰国し、抗日戦争に参加した。上海、武漢、重慶などで抗日宣伝活動をしつつ、文学創作をも続けた。抗日戦争中、『棠棣之花』(41年)、『屈原』(42年)、『虎符』(42年)などの6つの歴史劇を発表、国民党の反共、反民主的言論弾圧に抗議した。この間、大公報記者として東京に駐在した于立忱（かつて郭沫若と親密な関係にあり、37年5月帰国後自殺した）の妹于立群と結婚した。

日中戦争終結後、上海、香港で内戦反対、民主主義要求運動に加わった。中華人民共和国成立後、国務院副総理、人民代表大会常務委員文学芸術連合会の主席に就任。さらに中国科学院初代院長、中日友好協会会長などの要職にも就いた。文化・学術・国際交流などの諸分野で大きな貢献をした。建国後、歴史劇『蔡文姫』(59年)、『武則天』(60年) を創作、古代史研究でも多くの業績を残した。

Ⅲ. 郭沫若の代表作—詩集『女神』と歴史劇『屈原』

郭沫若は一代の文豪として世に多くの傑作を残した。彼の最も代表的な文学作品と言えば、20年代の新詩集『女神』と40年代の歴史劇『屈原』であり、これらは今日に至っても不滅の輝きを放っている。

『女神』は、郭沫若が1918年から1921年まで創作した詩、詩劇の作品を56篇収め、1921年8月に「創造社叢書」として上海泰東書局から出版した詩集である。この詩集は五四時期の反封建と個性解放の時代精神をたたえる中国現代新詩の代表作である。『女神』が出版されるや、多くのインテリ青年たちから熱狂的に称賛され、文壇に爆弾のような大きな衝

撃を与えたのである。著名な詩人であり、学者でもある聞一多は、「新詩と言えば、郭沫若氏の詩こそは新しいといえるだろう。彼の作品は古い詩詞と全く違うだけではなく、最も重要なのは彼の精神が完全に時代の精神—20 世紀の時代精神であることだ。……『女神』は五四時代の子である」[8] と高く評価した。

『屈原』(42 年) は、5 幕 6 場の歴史劇、郭沫若の多くの歴史劇の中で最も優秀な作品である。屈原は、戦国時代 (BC343？－BC277？) の楚の政治家、詩人、一時は左徒という重要な官職に就いたが、後に懐王に遠ざけられ、楚国の運命を嘆き、汨羅に身を投じた。郭沫若は愛国詩人としての屈原に強い関心を持ち、彼の作品『楚辞』について多くの研究も発表した。郭沫若は歴史劇『屈原』中で屈原の「離騒」を基にして、のちに人口に膾炙するようになった自作の「雷電頌」を書き入れた。それは屈原の「九死不悔」(九死しても悔いなし) の戦闘精神をたたえることによって、当時の国民党の反共政策と言論弾圧を批判したものである。

日本では 1952 年に須田禎一の翻訳によって『屈原』が未来社より出版された。前進座で、名優河原崎長十郎が屈原を演じ、1952、62、72、79 年と数年にわたって上演された。1980 年 11 月 20 日から 12 月 1 日まで河原崎長十郎が代表団を率いて天津、南京、北京の三大都市を訪問し、歴史劇『屈原』を公演した。至るところで大歓迎を受け、好評を博した。

Ⅳ. 郭沫若研究と再評価

郭沫若が亡くなってから、すでに 20 年余りが経った。この 20 余年間に中国が激しく変化したことは言うまでもない。

2002 年 11 月に郭沫若の生誕 110 周年を記念して、中国社会科学院、中国文学芸術連合会、中国人民対外友好協会、国家文物局及び郭沫若研究会などの政府機関、学術団体がさまざまな国際シンポジウムや記念行事を行った。しかし、近年以来、中国では歴史上の人物の品定めの風潮が盛んになり、これまで触れられなかった面にも光があてられるようになってきた。特に郭沫若についての再評価は注目すべきである。

まず、郭沫若の文化大革命中での発言が議論の話題になっている。郭沫若が文化大革命初期に、「自分の過去の著述をすべて焼却してほしい」[9] という自己批判の発言を行い、文芸界の「破四旧」(文化大革命中の用語、古い思想・文化・風俗・習慣を打ち破る) 運動の勢いを助長したという批判がある。また、1967 年 6 月 5 日に郭沫若はアジア・アフリカ作家の常務委員会主催の毛沢東の「延安文芸座談会の講話」25 周年の閉幕式で、江青を賛美する詩を詠った。前者は毛沢東が行った文化大革命に対して敬虔な気持ちを表したものとも考えられるが、後者は郭沫若が自分を守るための挙動としか見られない。

次に、郭沫若の私生活をめぐって、多くの非難が集まっている。郭沫若は一生に 3 回を結婚した。最初の相手は張瓊華という女性で、1980 年に 90 歳で亡くなった。彼女が郭沫若と一緒にいたのは 5 日間だけで、旧式結婚の犠牲者となったのである。2 番目の結婚相手は日本人の佐藤富子 (安娜) である。郭沫若は、自伝「跨着東海」にこう記している。「私が東京で安娜と最初に会ったのは 1916 年の夏、私が第六高等学校の 1 年を終えたときである。私の友人が肺を患い、アメリカ人が経営している東京・京橋区の病院「聖路加病院」に入院していた。私は夏休みを利用して岡山から上京、彼を見舞った。そのとき、安

娜はその病院に勤務していた。彼女は仙台人で、クリスチャンの学校を卒業し、産科医学を学ぶため上京したのである。私達は偶然に出会って、愛しあうようになり、その年の暮、岡山で一緒に住むようになった」[10]。郭沫若は安娜を深く愛し、彼女を心の中の「聖母マリア」のように見なした。1937年7月に郭沫若が帰国後、佐藤富子は日本の憲兵に逮捕され、大きな苦痛をなめた。彼女はいろいろな屈辱と甚だしい苦難に堪えながら、5人の子どもを立派に育てた。しかし、彼女が1948年に香港で再会したとき、郭沫若は既に別の女性と結婚し、同じく5人の子どもをもうけていた。その女性とは于立群である。いくら日本の侵略戦争のせいだったと言っても、20年間の困難な状況の中で苦楽を共にした妻を薄情にも捨てたことは、郭沫若のマイナスイメージにつながることは避けられない。

第三は、主に郭沫若の歴史研究の再検討・再評価に集中している。台湾中央研究院の院士余英時教授は、80年代に「『十批判書』與『先秦諸子系年』互校記」で、郭沫若が銭穆の著作『先秦諸子系年』を盗用したことを指摘した。また、郭沫若の『李白和杜甫』で李を誉め、杜を低く評価したことは「攀援権声」(権勢に取り入る)のようなやり方だと批判されたこともある。その後、国内でも相次いで郭沫若について再評価や批判の文章が発表された。2000年3月には中共党校出版社が、「盗用」説をめぐってこれに反駁する文章をまとめた『公正評価郭沫若』(公正に郭沫若を評価しよう)を出版した。

歴史上の人物について、おのおの自分の意見を述べ、その人物の実像を正確に把握することは後代の研究者のなすべき仕事である。郭沫若は詩人、劇作家、歴史・古代文字研究者たるにとどまらず、中国の革命に深く関わった革命家でもある。だから、彼についての研究や評価は、当時の複雑な政治や歴史の状況と切り離して行なうことはできない。この点では、郭沫若は梁啓超、胡適とかなり似ている。この三人は20世紀の中国において生涯にわたり、学術研究に力を注ぎ、それぞれの分野で卓越した成果を収めた。一方に国内政治に深く関わって政権の要職に就いたこともある。郭沫若が文革で江青を讃えたことなどは単に個人の気質の問題に帰すべきではなく、私はある意味で郭沫若は中国近代の知識人を代表する一人なのだと思う。

---

1) 郭沫若著、須田禎一訳『郭沫若詩集』、未来社、1972年12月。

2) 郭沫若旧居は北京市西城区前海西街18号である。開館時間は9時から16時、月曜日休館である。交通は13路線バス、107路、111路線トロリーバスを利用するとよい。

3) 于立群は1916年に広西賀県に生まれた。1938年1月に24歳年上の郭沫若と結婚。郭沫若との間に6人の子供を設けた。1979年3月13日に亡くなった。

4) 郭沫若「わたしの学生時代」、小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝』(1~6巻)(『私の幼少年時代他』所収、平凡社、1967年10月。

5 『経国美談』は矢野龍渓の有名な政治小説、1902年に周逵による中国語訳が『清議報』に連載された。

6) 張瓊華は、楽山県蘇渓張溝の人、1912年に父母の命で郭沫若と旧式結婚をした。結婚5日後、郭沫若が成都の学校に行き、別居となった。1980年6月24日に80歳で亡くなった。

7) 佐藤富子は、仙台の出身、中国名は安娜、郭安娜。1916年12月に岡山で郭沫若と結婚。郭沫若との間に5人の子供をもうけた。郭沫若が1937年帰国後、まもなく于立群と結婚したため、彼女は結局、郭沫若の「前夫人」になった。1949年に彼女は中国の大連に移住、子供と一緒に暮らし、1994年8月に上海で亡くなった。101歳。

[8] 聞一多「『女神』之時代精神」、『創造周報』第4号、1923年6月3日。

[9] 郭沫若の「文革礼讃発言」については、当時北京を訪問していた松村謙三が直接郭沫若から聞いたときの心境をまとめた文章がある。その主な内容は「知識人たるプロの文芸・学術工作者は、深く自己を反省すべきである。今までのように高く居座って、自己満足し、自己陶酔してはいけない。腰を低くして労働者・農民に学び、その生活のなかから題材を捜し、社会主義の中に創作の源泉を求め、時代に追いつかなければならぬ。(中略) このような情勢のもとで、私は知識人として、当面の文化革命において、身を以って模範を示すために自分自身を批判した」というものである。劉徳有著、村山孚訳『郭沫若・日本の旅・随行記』(サイマル出版会、1992年10月) 引用。

[10] 小野忍・丸山昇訳『黒猫・創造十年他』(『郭沫若自伝』(2巻) 平凡社、1967年10月。

参考文献：

- 王訓昭等編『郭沫若研究資料』(上・中・下)、中国社会科学出版社、1981年。
- 陳光中『風景：京城名人故居与軼事』(2)、新世界出版社、2002年1月。
- 小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝』(1~6巻) (『私の幼少年時代他』『黒猫・創造十年他』『続創造十年他』『北伐の途上で他』『続海濤集・帰去来』『抗日戦争回想録』)、平凡社、1967年10月～1973年1月。

(文学部　教授)